



かがみ



次代を担う子どもを地域全体で見守る

6月3日(月)に開催された「八戸市少年相談センター運営協議会」の協議内容を紹介します。本協議会は、子どもを非行から守り、健全に育成するため、団体・関係機関等と緊密に連携を保ちながら、子どもの問題行動を未然に防止することを目的としています。

1 八戸市少年相談センター運営協議会について



(1) 本協議会における協力団体・関係機関等

- ・青森家庭裁判所八戸支部、八戸警察署、青森県八戸児童相談所、八戸地区少年警察ボランティア連絡会、八戸地区保護司会、八戸市青少年生活指導協議会連合会、三八地区高等学校生徒指導部会、八戸市中学校長会、八戸市小学校長会、八戸市少年指導員

(2) 本協議会の協議内容(情報提供等を含む)について(要約)

- ・八戸市における子どもの「万引きの発生率」が、ここ数年、他市町村と比べ高水準で推移していることから、巡回指導や見守りによる万引きの未然防止に係る取組の一層の充実を図る。
- ・インターネット(SNS等)による子ども同士のトラブルが多発している。学校、家庭、地域社会でさらにインターネット(SNS等)に対する危機意識を高めていくとともに、周囲の大人(関係機関等を含む)への早期相談により、トラブルの深刻化を防げることを、大人が子どもに伝えていく必要がある。
- ・周囲の大人が、子どもの問題行動や非行に至った背景を十分に理解し、その子どもを支えることが大切である。
- ・子どもを取り巻く環境の変化や全国各地で発生している事件・事故を受け、関係諸団体による登下校時等における子どもの見守りの一層の強化を図る。

2 八戸市少年相談センターの取組について

(1) 街頭指導の充実

- ・少年指導員(地区青少年生活指導協議会の代表者、小・中・高等学校の教員、小・中学校PTAからの推薦者、大型店舗の職員など)146名による繁華街及び地区の巡回(平成30年度の巡回活動計240回、延べ878人による巡回)

(2) 少年相談の充実

- ・少年や保護者が、気軽に相談できる相談窓口
- ・少年相談センター電話 43-2142 平日10:00~17:00(年末年始を除く)
- 当センターでは専門の相談員による教育相談を受け付けております。育児や教育についての悩みなどご遠慮なくご相談ください。

(3) 社会環境の浄化

- ・地区青少年生活指導協議会等との情報交換を通して、地域ぐるみでの社会環境の浄化

(4) 健全育成・非行防止の啓発活動

- ・地域のコミュニケーションの活性化を図り、豊かな人間性と住みよい生活環境を築くための「さわやか 八戸 あいさつ運動」等の推進と啓発

全国的に子どもが巻き込まれる痛ましい事件や事故が発生していることを受け、「八戸市少年相談センター運営協議会」に出席した団体・関係機関等の皆様からは、特に子どもの見守りのさらなる強化等、安全確保についての情報提供がありました。

今後も、地域全体で子どもを取り巻く環境のさらなる改善に努めるとともに、子どもへの温かな声かけや見守りにより、次代を担う子どもの健全育成に取り組んでいきましょう。

にか 苦いかき氷…

八戸市教育委員会 教育長 伊藤 博章

かき氷の季節がくると、あの日の出来事を思い出す。教師になって3年目。夏休み中の部活動の指導も終わり、職員室にもどる頃には夕暮れどきの涼しい風が心地良かった。帰り支度をし学級を一巡していたとき、ちょうど柔道部の練習を終え汗だくになったK君がもどってきた。どちらからともなく、「プールに行こうか」ということになった。

にぎやかな歓声が響き渡っていたプールは静まりかえっていた。『本日終了』の木札のかけられた格子扉を開けてシャワーを浴び、飛び込み台から思いっきり飛んだ。プールの端まで泳ぎ着いたとき、「センセイ」と呼ぶ声…。K君が飛び込み台の下で頭に手を当てて立っていた。急いでターンをし引き返し、「どうした」と聞くと飛び込み台にぶつかったという。

あわてて車で病院に走った。血相を変えて飛び込んできたわたしに、医師は「先生、大丈夫ですよ。プールでふやけた頭の皮膚はやわらかく出血しやすいんです」と。それから「傷口がきれいですからテープで処置しましょう」と看護師に何か指示をしている。髪の毛を少しそりますからと処置室に連れていこうとした看護師に、「縫わないのですか」と尋ねた。「傷口がきれいになるように皮膚をくっつけるテープがあるんです」と、笑って答えた。

セロテープ？ 命に別状はないの？ それだけがぐるぐる頭の中を巡り、どっと疲れがでた。「先生これ」と、差し出されたのはプールサイドに置いてきたわたしのジャージ。クラスの女子生徒があわてて飛び出していった担任を追いかけてきたのだ。自分が水泳パンツと白いTシャツのままであったことに、そのときようやく気がついた。まもなく頭に白い包帯を巻き、編み目のネットを被った彼が少し青ざめた顔で出てきた。「すみません」、彼はぺこりと頭を下げた。処置が終わって帰り際、医師に「外傷だけで、特に心配はないですよ」と告げられた言葉が天の声にも聞こえた。

二人とも落ち着いたところで、次は主任と校長とK君の母親に事故の顛末を報告し謝罪しなければならない。自分なりの覚悟を決めた突然の訪問に、主任は「よく来てくれた、帰りにおいしいものでも食べさせなさい」と、お札をわたしの手に握らせてくれた。校長宅では、すでに主任から連絡ずみだったのか校長が玄関口で待っていて温かな言葉をかけてくださった。お母さんの勤め先を訪ねたとき、包帯頭の我が子を見て一瞬びっくりされたようだったが、「落ち着きない子で、かえってご迷惑をかけてしまいました」と、しきりに恐縮していた。

帰りみち、彼と一緒に近くの食堂に入った。裸電球の下で白い包帯の巻かれた頭が焼きそばを食い、真っ赤ないちごシロップのかかったかき氷を食べている。



あれから50年の歳月が流れた。未熟な青年教師は最も大切な人生の教訓を、この苦い経験から学んだ。今年同期会に呼ばれ久しぶりに彼の元気な顔を見た。今もけっしてブレることのない「いのち最優先の教育」の理念は、あの夏の日の白い頭が教えてくれたものだった。